

逸木裕 × 山下絢研究室

— 大学時代の過ごし方、大学卒業後の過ごし方 —

Yu Itsuki × Jun Yamashita Laboratory: How to Make the Most of Your
College Life and Post-Graduate Career

逸木裕、山下絢研究室

Yu Itsuki, Jun Yamashita Laboratory

はじめに

この講演記録は、2017年6月1日（木）に、教育学演習Ⅰ（担当：山下絢）において行われた、逸木裕氏（ミステリ作家）の講演会の様子をまとめたものである。

私が担当する教育学演習Ⅰでは、ブレインストーミング及びグループワークの練習も兼ねて、前期は所属ゼミ生全員で質問項目を作成し、実際にインタビューを行っている。これまでも卒業生の方を中心として、多くの方に御協力を頂いてきた。今回ご協力くださった逸木氏は、2013年より日本女子大学教育学科の会のWebページの作成・運営を担当してくださるなど、同会に尽力してくださっている。本学科の会と繋がりのある同氏であるが、2016年に、第36回横溝正史ミステリ大賞を受賞され、『虹を待つ彼女』（角川書店）を上梓された。また講演会後の2017年には『少女は夜を綴らない』（角川書店）を上梓された。

私は『虹を待つ彼女』を拝読し、内容の面白さや非凡さが実感できたことは言うまでもないが、この作品の会話の一部の「雑な一般論でまとめるな」という表現に目が留った。この表現から、私自身が大学での勉学の意義や就職について、いわゆる一般論で語っていないか、あるいは、学生の皆さんも周囲の一般論に翻弄され、本来の自分の夢を見失っていないのか、これらの問いを深く考えさせてくれる契機であった。

逸木氏は、法学部を御卒業後はシステムエンジニア（SE）として会社に勤務された。その後は、フリーランスのSEとして生計をたてられる傍らに、作家活動をされ、現在に至っている。そうした逸木

氏のキャリアの積み重ね方も興味深いものであり、大学卒業後の進路を考える上で大変有益であると思われる。逸木氏と私は大学時代のオーケストラ（インカレサークル）で一緒に活動しており、その御縁もあって、この講演会の運びとなった。

講演では逸木氏に、御著書のことや、学生時代の過ごし方、そして、どのようにしてキャリアを築かれたのかについて、学生の皆さんからの質問事項を事前にお送りした上で、質疑応答という形式を依頼し、本学に足を運んでいただいた。本稿はその講演記録であるが、内容の読みやすさを考慮し、一部、加筆修正を行っている。

1. 逸木裕氏による—自己紹介

逸木 逸木裕と申します。今日は、お呼びいただき、ありがとうございます。よろしくお願い致します。自己紹介ですが大学では法学部に通ってりました。卒業してから普通に就職活動をしまして、そこからプログラマーとして5年ぐらい会社で働いていましたが、そこから独立して、フリーランスのプログラマーで、今までずっとやってきている形になっています。

小説の方は、子どもの頃から読むのが好きで、中学1年ぐらいのときにはもう作家になりたいという夢を持っていました。実際、中学、高校の6年間小説を書いて、文学賞に投稿したりしていたのですが、やはり10代のやることは、なかなか芽が出ませんでした。大学に入ってから趣味の、オーケストラの活動の方に興味が向いて、ずっとそっちの方を忙しくやってきました。卒業して20代はずっとオーケストラ活動をやっていたのですが、30を過

きたぐらいからもう一回、小説を書きたいと思って、この3、4年ぐらい投稿活動をしていました。昨年、KADOKAWAの横溝正史ミステリ大賞を頂いて、それでようやく本が出る形になって今に至ります。簡単ですが自己紹介は以上です。

2. 『虹を待つ彼女』について

学生 今日貴重なお時間を割いていただきありがとうございます。早速ですが、まずは、小説のことについてうかがわせて下さい。本にもいろいろなジャンルがあると思うのですが、その中でミステリー小説を書こうと思ったきっかけをお聞かせください。

逸木 ミステリーは子どもの頃から一番好きなジャンルでした。今の若い人の読書傾向は分かりませんが、私ぐらいの年代だと、小学生ぐらいの子どものときに本の好きな人が読むとなると、江戸川乱歩やコナン・ドイル、『シャーロック・ホームズ』や『怪盗ルパン』辺りが定番で、子どもの頃から本が好きだったので、ミステリーの読書量は自然と多くなっていたという感じがします。

自分が書くものについては、ミステリー小説も書いていたのですが、必ずしもミステリーだけではなくて、一般小説と言われるものも書いていました。一般文芸と言われるジャンルで最近の有名なものだと、朝井リョウさんは知っていますか。『桐島、部活やめるってよ』といった人間の心理を読む

タイプの小説です。ミステリーと一般文芸は半々ぐらいで書いていたのですが、今回はミステリーの賞を頂いたので、ここから出てきたという感じですが、まとめで、子どもの頃から好きだったというのと、あとは余りミステリーにこだわっていたわけではないのですが、そちらの方で評価を頂いたということです。

学生 作品を拝読して、とても登場人物が魅力的だと思ったのですが、小説を書くときに、そういった登場人物のモデルはありますか。

逸木 今まで会った人が断片的に出ています。ですから、この人イコールこれというものはありません。この人のこの部分はここに入っているというふうに、断片化されたものの集まりみたいなものになっていると思います。それは仕事上での付き合いもそうですし、オーケストラで知り合った人もそうですし、あと、一方的に知っている有名人が入ってきたりということもありますし、他の漫画やアニメ、小説のキャラクターが影響を受けているということもあります。今まで経験したものが取り混ぜられて入っているという感じです。

学生 ミステリーについて質問させていただきま。私も今回読ませていただいて、内容が複雑だと思う部分があったのですが、複雑なミステリーを考えるコツはありますか。

逸木 どの辺が複雑だと思いましたか。

学生 最後の方は解き明かされていく感じなので、普通に読んでいて分かったのですが、最初の方は登場人物も多かったり、あと、場面が切り替わったりするところで、少しつながりが難しかったりしました。結構、複雑な構成だと思ったので、そういうところに、こだわりがあるのだろうかと思ったのです。

逸木 読者の方を飽きさせるのは怖いということがまだあって、それで結構いろいろな展開を入れているということはあると思います。それがいいか悪いかとなると難しく、読者の方に合う・合わない、というのがあると思います。いろいろなものを入れて、なるべく読者の方を飽きさせないように読んでもらおうとはしているのですが、それは結構、良しあしで、分かりづらいという感想が出てくるというのも分かります。

学生 角川書店から本を出すことになったのは、ど



図1：逸木裕氏の著作

出所：角川書店 web ページより

<http://www.kadokawa.co.jp/category/book>

のような経緯だったのでしょうか。

逸木 これはまず、横溝正史ミステリ大賞という公募の賞があって、そこが作品を受け付けているのです。応募して賞を取れば本になる、というものです。私の場合はそこに応募して、大賞を幸いいただきましたので、それですんなり本にさせていただきました。

3. 作品の執筆、仕事の進め方について

学生 ミステリーをどうやって、どの辺りから考えているのですか。また、そのアイデアはどういったタイミングで浮かぶものですか。

逸木 原理から言うと、多分、今までインプットしてきたものが、あるときに頭の中で結びつく瞬間があるのですけれども、それは再現できないというか、本当にたまたまなのです。『虹を待つ彼女』に関しては、普通に仕事をしているときに最初のシーンを思い付いて、そこから敷衍して書いていったというところがありまして、その最初のアイデアの種みたいなものを思い付くのは、様々なときです。考えて考えて思い付くときもありますし、あるときに、いきなり思い付くときもあります。それは、やはり継続的にインプットしているものが土台になっていると思います。

学生 一つの物語を書くのに、大体どのくらいの時間をかけていますか。

逸木 投稿時代は5か月に1本ぐらいのペースで書いていました。準備であらすじを最初に作ってから原稿を書いて、といったことをやっていたので、割とペースどおり書けていたのですけれども、最近、本が出てからもう1冊書いているのですが、それは編集者と何度もやり取りしたりしているので、少しペースが落ちてしまっています。

学生 小さい頃から読書していたという話を今うかがいましたが、好きな作家や、こういうふうになりたいという作家はいらっしゃいますか。

逸木 一番好きなのはロバート・マキャモンという作家です。多分、皆さんは知らないと思います。というのは、この20年ぐらいずっと本が出なくなってしまった作家なので、日本でも余り知っている人がいないのです。私が10代ぐらいのときに少し日本でもブームになった作家で、もとはホラー小説を

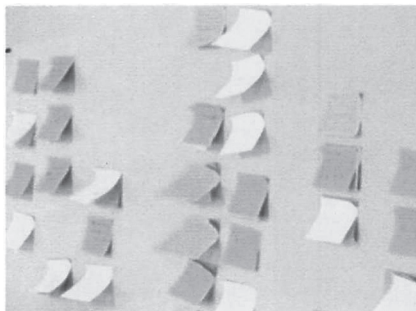


図2：インタビュー項目設定のためのブレンストーミングの様子

書いていました。スティーヴン・キングを知っている人はいるでしょうか。映画で言うと『ショーシャンクの空に』の原作を書いたのはスティーヴン・キングなのですが、その後継者と言われた人です。ホラー作家で、一つ一つの話はすごく長いのですが、メインのストーリーに対してサブエピソードみたいなものがたくさんあって、それが最終的に全部メインのストーリーに合流していくといった物語の作り方を得意としている作家です。その人の本がすごく好きで、そういう構造の話を書きたいというのがあります。

日本の作家ですと、好きな作家は本当にたくさんいて、それこそこの前、直木賞を取った恩田陸先生は、かなりたくさん読んでいますし、あとはホラー小説の『黒い家』を書いている貴志祐介先生です。純文学だと、三島由紀夫と大江健三郎が好きです。好きな作家というより、好きな作品がたくさんあって、少し雑多な感じなのですが。

学生 好きな作品の中で、私たち学生でも十分に理解できるような、お薦めの本はありますか。

逸木 どういう系統がいいですか。ミステリー、それともエンターテインメントですか。

学生 私はミステリーがすごく好きです。

逸木 読みやすいとなると、最近では多分、東野圭吾先生ではないでしょうか。文章もすごく読みやすいですし、分かりやすいように書いてあります。お薦めというと難しいのですが、私が好きなのは『白夜行』という小説です。ドラマにもなっていると思います。あと、学生には恩田陸先生も読みやすいと思います。この前出た『蜜蜂と遠雷』はピアノコンクールの話なのですが、直木賞を受賞されました。

あれもすごく面白くてお勧めです。お勧めという
と、多分、延々と1時間、2時間ぐらいしゃべって
しまいますので、この辺で。

学生 話が思い浮かばなかったり、行き詰まったり
したときは、どのようなことをされていますか。

逸木 行き詰まったときは、取りあえず、小説は何
でも最後まで無理やり書いています。小説だけでは
なくて、自分で作るプロダクトは何でもそうだと思
いますけれども、まず完成させるということがとて
も大切です。行き詰まったところで放置してい
ると、行き詰まったまま何もできず終わってしまう
ことがあるので、結末は何となく思い浮かべているわ
けですから、そこまで何とかつないで、後で直すとい
うことをやっています。これは何でもそうですけ
れども、行き詰まりは時間が解決してくれるという
か、時間がたつと、何かいいアイデアが思い付くと
きが結構ありますので、取りあえず書いて、最後ま
で行って、少し後で直すということで放置していま
す。

学生 仕事をするときに、どこで仕事をするのが一
番はかどりますか。

逸木 私は喫茶店でやっています。基本的に外で
す。というのも、家の中は今、猫と妻がいて、あの
2人がいるとはかどらないのです。妻は休日仕事な
ので、平日に家にいるのです。私が平日にいて小説
を書いていると、どうしても家の中でバツティング
して、そうするとペースが乱れるので、外に行って
書いています。近くに大きいショッピングモールが
ありまして、その中にフードコートが入っているの
で、そこで書いたりもしています。

山下 喫茶店では、何時間くらいかけて執筆されて
いるのでしょうか。

逸木 1、2時間ぐらいでしょうか。執筆場所もあ
ちこちで書いています。長い時間は集中できないの
で、1時間やって少し休んで、1時間やって少し休
んでというサイクルを繰り返している感じです。

学生 集中したいときは、区切れないように工夫し
ながら、時間を細かく分けて書くのですか。

逸木 そうです。100パーセント集中というのは、
長く持たないので、なるべく長い時間コミットでき
るように、緩やかにやっているというか、集中も余
りしすぎないようにしています。80パーセントぐ
らいの感じで長い時間、執筆しています。

山下 執筆のペースを保つために、逸木さんの場合
はいろいろ工夫されているというふうに御自身の
web ページにも書かれていました。それを少しシェ
アさせてもえればと思います。

逸木 ペースを保つのは、まず睡眠をきちんと取る
ということです。これがまず基本です。睡眠が崩れ
ると全部崩れてしまうので、ここは必ずマストで
取っています。1日6、7時間ぐらい寝ています。
朝起きて、家の周りを30分ぐらい散歩しています。
それは有酸素運動というのもそうなのですが、朝に
日光を浴びると、体内時計がリセットされて、夜が
来るときちゃんと眠くなるので、それをやっている
というところですよ。

山下 ご自身でプログラミングをして、自分でネッ
ト等を見られないようにされていると以前うかがい
ましたが、その点についてもお話しいただければと
思います。

逸木 私はネット中毒なので、余りネットを見ない
ようにしています。ですから、パソコンから例えば
Twitter や Facebook はもうつなげないように、ネッ
トを遮断する機能を自分で作って、それを動かし
たりしています。スマホは、なるべく Twitter のアプ
リを消したりしています。悲しい地道な努力をして
います。

学生 執筆活動をしているときに、途中で飽きてし
まったり、仕事に疲れてしまったときに、気分転換
はどのようにしていますか。

逸木 気分転換は難しいですね。基本的に、決
まった時間はやるようにしています。1時間やると
決めたら1時間は必ずやる。私はタイマーを常に持
ち歩いているのですが、タイマーを付けておいて、
そこまでやるというふうにはやっています。ですの
で、余り飽きてしまうということはありません。決
まった時間まで、とにかくやるということをやっ
ていて、気分転換は運動でしょうか。1日のノルマを
終えた後は、ジムに行って体を動かしたりというこ
とをしています。

学生 今は紙の媒体だけではなくて電子書籍もあり
ますが、逸木さんが子どもにお勧めするとしたらど
ちらですか。

逸木 紙か電子か。どちらでもいいのではないで
しょうか。私は電子書籍で読むことの方が最近、多
くなってきているのですが、紙は紙で独特の読み心

地があります、やはり本を持って読むのは、それだけでいい気分になるところがあると思いますが、読みやすいとなると、電子書籍で読むのが圧倒的に読みやすいです。ですから、それは本当にどちらでも気に入った方でいいのではないのでしょうか。

学生 少し前に『校閲ガール』というドラマをやっていて、それで気になったのですが、本を出すときには本当に校閲で赤ペンをされて返ってくるのですか。

逸木 されます。今まさに校閲の作業をやっているところで、自分の書いた原稿に赤ペンではなく鉛筆で指摘を入れてやってきます。それを著者が赤を入れます。赤を入れるというのは、その指摘を採用するか・しないかを丸で囲んだりして送り返すということです。校閲がいないと、やはり商業出版の本は出せません。著者が書いているだけでは間違いも多いし、日本語の微妙な間違いとか、勘違いして書いているときも結構あります。あとは単純に誤字脱字があったりするので、そういう所を直してくれる人がいないと、なかなか本にするのは難しいと思います。『校閲ガール』はKADOKAWAで出ているのでKADOKAWAのビルで取材したらしくて、私の編集さんが石原さとみに会ったと言って喜んでいました。

学生 この本を読ませていただいて、私はふだん全く本を読まない人間なので、難しい言葉に慣れておらず、話のニュアンス的にこういう感じなのだろうなと読んでいました。少し難しいと思うような言葉や、普段は使わないような言葉遣いを、どの本でもされると思うのですが、こだわりを持って、あえてそのようにしているのですか。また、編集者の方に、このような表現にした方がいいというアドバイスを頂いて変えているのですか。

逸木 細かいチューニングは、かなりやっています。私がこだわっているのは読みやすさです。凝った表現で書くというよりは、流し読みでも頭に入ってくるぐらいの文章が書きたいと思って書いています。ですので、細部の文章表現を作り込むというよりは、読みやすく、頭に入ってくるような文章で書くことにこだわっています。

山下 何か表現のストックをしていますか。

逸木 表現のストックはしていません。でも、した方がいいかもしれないと思っています。今はせず

に、その場その場で書いています。

学生 本を書く上で、自分の書きたいものを書いているのか、それとも、読者に何かを訴えかけたいから書いているのか、どちらでしょうか。

逸木 自分の書きたいものというよりは、読みたいものを書いているという感じです。書きたいものとか、読者に受けそうなものということを考えていると、どうしても迷ってくるのです。自信もなくなってきました。それよりは、自分が読みたいものは自分で分かっていることなので、絶対的なものですし、読みたいものが同じような人は世の中に割といるもので、そういう人たちにも届くだろうということを考えて書いています。ですので、自分が読みたいけれども世の中にはない小説というのを探して、それを書いて、編集者に読んでもらうという感じです。

学生 『虹を待つ彼女』の本を書くときに、あらずじはすぐに思いついたのですか。それとも熟考して思いついたのですか。

逸木 この作品に関して言うと、冒頭のシーンは最初に思い付きました。女の子がドローンを使ったゲームを開発しているのですが、そのゲームからドローンを操って渋谷の街を襲うという最初のシーンをまず思い付いて、これは割と面白い思い付きではないかと思ったので、そこからストーリーをあと、つなげて考えていきました。考えていくにつれて、人工知能の要素が入ってきたりと、どんどん膨らんでいったという感じです。正直、思い付いたときのことは覚えているのですが、その後、どうつながっていったのかは記憶がもう、ほとんど曖昧になっていて、自分でもどういうふうに至ってこれになったのかは、余り筋道立てて説明できないところがあります。

学生 最初に思い付いたときは、例えば仕事をしながらふと思いついた、あるいは、歩きながら思いついたなど、どのような場面ですか。

逸木 この作品に関して言うと、仕事をしていたときでした。でも、ほんの何げない、他の本を読んでいる思い付くときもありますし、友達と話していて何か思い付くときもありますし、様々です。

山下 その話のゴールも見えていたのですか。

逸木 これは見えていませんでした。見えていないというのは、これは応募する前に6回ぐらい書き直しているのですが、1回目の結末とは全然、違う結

末になっているのです。何かこれではないと思ってもう一回、頭から書き直したという感じです。

山下 それは、通われていた小説の教室で何か指摘を受けたのですか。

逸木 いえ、それは全くありません。私が通っていた小説講座は、さっきの音楽の話ではありませんが、余り中身をいじってきません。先生はいるのですが、それよりはきちんと締め切りを守れとか、資料を読めとか、作家の姿勢の方にコミットする人で、中身は取りあえず個性だから、そこはいじらないという方針の先生でした。ですから原稿も、読んでも特に感想もくれず、これでいいという感じがします。

山下 この小説は、本当に最先端の技術といった要素が取り入れられていますね。これはふだんの仕事からも入ってくる情報で書き切れたのですか。それとも、何かどこかで改めて勉強されたのでしょうか。

逸木 取材しました。今回の場合、資料を読むだけでした。対面、人に会って取材する場合がありますが、私はこれを書いた頃はアマチュアだったので、取りあえず人工知能の本等をありったけ読んで書きました。

山下 人工知能に精通されていたというのではなくて、走りながら人工知能に関する最近の動向を作品の中にとり入れていったということなのですね。

逸木 そうです。もともとプログラマーですので、プログラマーの世界ではこの何年かずっと人工知能は結構ホットトピックなのです。なので、自然と入ってくる情報は自分の中でも、もちろん蓄積は多少あったのですが、書くに当たって専門的な本を読んで、知見を深めていきました。

学生 人工知能に関してですが、この先、人工知能でほとんど人間の仕事をできるようになると言われていますが、人工知能に置き換えられない、人間であることの良さみたいなものは何だとお考えですか。

逸木 難しいですね。人工知能が最終的にどうなっていくかは多分、誰にも分かっていなくて、それこそ一番極端なことを言う人だと、人間が要らなくなるのではないかと、みたいなことを言う人もいます。難しいところです。今のところ、例えば小説を書くとか、音楽を作るとか、そういうクリエイティブ

ティの部分はなかなか人工知能では代替できないのではないかとはいわれているのですが、そこもどうなるかです。というところで、その辺は少しまだ未来が読めない感じでしょうか。

学生 最近の、小説が映像化されることについて、率直にどう考えられていますか。

逸木 別物という感じはしています。好きな作品が映像化されても、それで見るとかいうと、特に見ていないですし、それでイメージが崩されるというふうに怒ることも余りないという感じでしょうか。逆に言うと、小説で余り評価が高くないものが映像化されて、すごく評価を受けるといときもあるもので、それはそれで別物として考えているという感じがします。そういうことは気になりますか。最近は漫画が多いですね。去年は『テラフォーマーズ』をやっていました。

学生 小学生時代に授業で小説を書いたことで、小説を書いていいのだと思ったとおっしゃっているのですが、今、小学生は本を読む機会が減っていたり、ゲームが普及し、本を読む子が少ないと私も感じているのですが、普段から本に囲まれた生活をされていたのですか。

逸木 本に関しては、うちも余り自宅にはありませんでした。近所に神社があって、そこは漫画がとにかく大量にある神社で、児童館みたいなものが神社の横に併設されていたのです。そこに卓球台があったりとかして、子どもが通って遊んでいるような所だったので、そこで漫画や子ども向けの、さっき言った乱歩とか、そういうものが置いてありました。雨の日になると友達と余り遊べないので、そこに行って遊んでいたのです。そこでマンガを読んだり、本を読んだりというところから入っていった感じでしょうか。あと、私は、地元が小田急沿いの小田急相模原という所にずっと住んでいまして、中学は都内に通っていたので、その間、通学時間が片道1時間半ぐらいあったのです。そこで、暇だし、当時はスマホや携帯電話がなかったので、そこで本を読んでいたというのが大きいです。

4. 今後の目標について

学生 今後の目標や野望がもしあったら教えてください。

逸木 ベストセラーを書きたいとか、野望はいろいろあるのですが、余り考えないようにしています。文壇の世界は結構、賞がたくさんあります。やはり直木賞、芥川賞が一番有名ですが、エンターテインメントだと山本周五郎賞や推理作家協会賞等、割とグレードの高い賞が幾つかあって、そういうのが欲しいという気持ちは当然あるのですが、なかなか結果はコントロールできないので、余り期待しているとモチベーションが続かない気がしています。ですので、自分ができること、次の作品を書くとか、毎日決められた分量を書いて、決められた分をインプットするということが続けていきたいというのがあります。結果は神のみぞ知るというか、どうなるかは後から付いてくるだろうと思っています。

学生 作家の仕事は今後どのぐらい続けていきたいですか。

逸木 今のところは死ぬまで書きたいです。注文がなくなる可能性もありますし、どうなるかは分かりませんが、希望としてはそうです。

学生 会社員から独立してプログラマーになられたそうですが、今は兼業されているのですか。

逸木 兼業です。お客さまがいて、月水金、その会社に行って働いています。火木土日は原稿の仕事をしたり、プログラムの仕事も少しはみ出たりしていたら、それをやったりという感じで働いています。

学生 兼業をしていて大変だと思うことはありますか。

逸木 それは時間がないことです。今は基本的に一日中、仕事です。文筆はすごく収入が不安定なので。労働集約型の仕事でもあって、本を出すためにはたくさんの分量をまず書かなければいけなくて、働かないとお金が入ってこないという側面があるので、なかなか文筆1本だとまだ全然食べていけないというレベルです。兼業をしていると収入がある程度、安定してあるというのは良いのですが、その分、自由な時間がないというか、好きなことをする時間が今なくて、少し困っています。

学生 プログラマーやSEとしての仕事と、作家としての仕事の、それぞれのやりがいや違い、好きなところをお聞かせください。

逸木 プログラマーの仕事は、お客さんに求められるものを作ればいい、決められたものを作ればお客

さんも喜んでくれるという、やることとゴールが決まっているというか、それをひたすらこなしていけばいいという気楽さと、そのお客さんに喜んでもらいやすいというところで、やりがいがあります。小説の場合はゴールが見えないというか、何を作ればいいかというところから自分で決めないといけないし、それが正解か間違っているかというのも、自分で責任を取らなくてはいけないところがあって、そういう面での苦しさというのはあるのですが、その分、出したものを読者の方に喜んでもらえる機会があって、感想を頂いたりするときもあるので、それで好意的な感想を頂くというのは、すごくうれいす。それはやりがいですがすごく大きいです。

学生 本を書いていて一番良かったと思うことは何ですか。

逸木 書いている最中は、結構、苦しいです。苦しいというのは、小説もそうなのですが、自分から何か作るときは自分の限界との闘いというか、駄目な自分、思いどおり書けない自分とか、そういうものと直面しなければいけないので、精神的に結構しんどいというのはあります。良かったことは、作家になりたい、本を出したいというのは、子どもの頃からの夢だったので、もちろん本ができて手元に來たときはすごくうれしかったのですが、それよりも、先ほどと少しかぶりますが、やはり好意的な感想を頂いたときです。それはうれしいのだろうというのは何となく分かっていたのですが、本当に想像を超えるぐらいうれしくて、今でもたまに感想をネットに上げてくれる方がいるのですが、やはりそういうものを読むのはうれしいです。

学生 作家になって周囲の方の反応はありましたか。

逸木 余り作家として持ち上げてくれるといったことはありません。今日は山下先生がやってくれていますが。妻も変わらずですし、親も特に変わりはありません。でも、受賞したときは皆さんが喜んでくれて、Facebookに書いたのですが、それはやはり、うれしかったです。

5. 御自身のことについて

学生 逸木さんが思う御自身の長所や短所はどこですか。

逸木 長所は、多分、計画を立てたら淡々とずっとできるというところがあると思います。余りアウトプットの波がないというのでしょうか。編集者にも言われるのですが、平素どおり仕事ができるというのは多分、長所だと思います。作家の方は結構、波のある人が多くて、書けるときは書いて、何もできないときは何もできないでずっと寝ているだけといった人もいらっしゃるのですが、私はある程度、毎日決まった分量を書いて、規則正しく生活を送ることができるということがあると思うので、そこは仕事をやる面では長所だと思います。短所は、ネガティブなところ。すごくネガティブなんです。本当にひどいです。余りいいことがないので、最近少し直すようにしています。悪い感情に飲み込まれないようにしています。

学生 ネガティブというと、例えばどのようになってしまうのですか。

逸木 深く悩んでしまうのです。今は新作を書いているのですが、これが世の中に出たら果たして評価されるのだろうかとか、本当に面白いのかとか。心配性というか、悩んでも仕方がないところで気持ちがとらわれて、悩みがちというところでしょうか。

学生 現在に至るまでに、自分の中で重要な経験となったことや、影響を受けた人や物はありますか。

逸木 重要な経験は、何度か話に出ているのですが、私の場合は音楽です。音楽は結構、一生懸命やっていました。というのも、私がいたオーケストラには同年代にかなりうまい人が多かったのです。上も下も同学年もそうだったのですが、結構うまい人が多くて、そういう人たちのようになりたいと思って、かなり頑張って練習していました。社会に出てからも仕事の合間を縫ってずっと練習を続けています。楽器を割と一生懸命やっていたので、そうすると、自分のスキルが付いていく過程、練習をどれぐらいやればどのぐらいスキルが付いていくかというのが、その楽器の練習を通じて経験できたところが大きかったです。

それは仕事をやる面でも、小説を書く面でも役に立っていて、例えば小説だと、新人賞に送ってもなかなか結果が出ません。私は4作目で取れたのですが、これはかなり早い方で、10年ぐらいは下積みする覚悟でやっていました。楽器の練習を通じ、頑張っ

てやっていたので、そうすると、小説の方面でも、落ちても落ちても、取りあえず書いてさえいればスキルは伸びていき、いつか受賞出来るだろうという想いがありました。そういう長い視野を持っていたのは、やはり楽器です。ですので、いろいろなことをやる上で、何か自分が好きなことを一生懸命やって長く続けている経験があるか・ないかというのは結構、大きいのではないかと思います。

学生 もしあれば、座右の銘を教えてください。

逸木 松下幸之助氏が言っていた言葉で、「失敗したところでやめてしまうから失敗になる。成功するところまで続ければ、それは成功になる」という言葉がありまして、それが座右の銘です。ですので、多少うまくいかないことも仕事をやる面でもいろいろあると思うのですが、それを気にせず続けていくということをモットーにやっています。

学生 ネガティブとおっしゃっていたのですが、他人と自分を比べてしまうことは、ありますか。

逸木 比べてしまうことはあります。でも、なるべく最近はしないようにしています。比べるというのは、例えば同年代の作家でも、私は80年生まれなのでもう37歳ですけれども、この年齢になると同年代の人でもすごい大作家になっている人もいます。そういう人と比べると、どうしても自分の至らなさに目が行ってしまうのですが、余りそこは比べても仕方がないという感じが最近していて、なるべくそこに、とらわれないようにしようとしています。

6. 学生時代について

学生 学生時代、何か特別な経験や印象に残った経験はありましたか。

逸木 学生時代に1回だけ予選を通ったことがあって、それはうれしかった記憶が残っています。特別なことは何でしょう。私は男子校だったので、余りロマンスもなく、淡々とした生活を送っていました。大学に入ってオーケストラを始めたのは、とても楽しかった思い出でしょうか。それこそ山下先生ともずっと一緒に同じ釜の飯を食べました。大学オーケストラはみんなやりたいことが多いし、若いから結構ぶつかりますし、大変なのです。それでも

卒業の演奏会をみんなで一緒にできたというのは、すごく印象に残っています。

学生 今まで小説を書きたいと思ってから累計どのぐらいの本数を書いてきたのですか。

逸木 本数は、投稿時代は5本で、中高のときは4本の9本ぐらい書いているでしょうか。プロになってから今、1本書いているので、合計で言うと10本ですね。

学生 小説を本当に初めて書いたときに、どうして小説を自分で書いてみようと思ったのですか。

逸木 小学校のときから漫画や小説がずっと好きで、読むだけは読んでいました。それまでは余り書くという発想がなくて、面白いと思って読んでいただけの時間がずっと長くあったのですが、あるとき、小6のときだと思うのですが、教科書の課題で、あなたも小説を書いてみましょうといった課題があって、そこで、今まで好きで読んできたものを自分でも書いていいのだというふうに、少しそこで発想が入ったのです。それで書いてみようと思って、中学に入ったぐらいから書き始めました。小学校のときには、私は中学受験をしていたので余り時間がなくて、中学に入って少し落ち着いてから書いていました。書いていたのは、中1から高3までです。その6年間はずっと書いて、賞に応募したりしていました。

7. キャリアについて

山下 逸木さんのキャリアに関することで質問をさせていただきます。法学部を卒業してSEになられたのは、もともとプログラミングに関心があったのでしょうか。

逸木 ありました。プログラミングも、私は小学校ぐらいからやっていたのです。小学校のときに物理部があって、そこはパソコンが使えたのです。当時92年ぐらいでしょうか。それこそWindowsもないような時代で、子ども向けのOSがあって、そこでプログラミングをさせてもらえるような部活があったので、そこに入ってプログラミングのコードを書いたのです。ですので、プログラマーになりたいというのも何となくあったという感じでしょうか。ただ、私たちの頃はものすごい就職氷河期で、ロストジェネレーション世代という言葉聞いたことがあ

ると思うのですが、私はちょうど、その一番下ぐらいなので、就職できればいいといった世界だったのです。その頃ちょうどプログラマーは余り人手が足りていなくて、それで結構あちこちで募集していたので、ちょうどいいと思って始めたのがきっかけです。

山下 ちょうど逸木さんが就職される私達の世代は、就職のために留年を選択する学生が多くなっていった時でした。新卒の資格のために、あえて卒業せず遅らせ、新卒一括採用の問題も様々な場面に議論されていました。

逸木 最近はいよいよ変わっているのでしょうか。どうなのでしょう。

山下 今、ちょうど4年生は就職活動を頑張っていますが、解禁日が変わったり、大変だと思います。

逸木 私の頃は解禁日が早かったのでしょうか。記憶によると、確か3年の秋ぐらいから半年ぐらいやっていました。決まらない人は、1年ぐらいずっと就活をやっているといった感じでした。

山下 先ほどから、結構、健康に気遣っているいろいろなというお話がありましたが、それは、体を壊してしまったとか、何かきっかけがあったのですか。

逸木 きっかけはないのですが、やはりプログラマーも文筆もずっと座り仕事で、放っておくとどんどん健康状態が悪くなっていくので、意識的に体を動かすようにはしています。楽しいし、運動すると他のことにもいい影響があるというか、頭脳労働の方にも、頭がクリアになって集中しやすくなったかもしれません。

山下 それは、本や誰かからのアドバイスをもとにそのようにされたのですか。それとも御自身の経験からでしょうか。

逸木 周りの人がやっているということが大きいでしょうか。プログラマーの業界は割と体に気を使っている人が多くて、ジムに通っている人も多いし、先輩がたも運動したりマラソンを走ったりしている人もたくさんいるので、そういうところから影響を受けたということはあると思います。

山下 小説を書くために、専門的なトレーニングを受けたとか、何かスクールのようなところには行かれていたのですか。

逸木 スクールは、その本のあとがきにも書いてあ

るのですが、時代小説家の鈴木輝一郎先生がやっている小説講座に通っていました。というのも、やはり楽器をやっているようなのですが、メンターですね。自分が習うべき人がいる方が成長するスピードが速いと思っています。それで、誰かに教わりたいと思って通っていました。

8. 学生へのアドバイス

学生 人生の先輩として、大学生のうちにやっておくべきことは何でしょうか。

逸木 難しいですね。一番いいのは、何か好きなことがあるなら、それを突き詰めてやるということです。それを仕事にするか・しないかという問題はまた別にあるのですが、1個の物事に深くコミットしていくということは、さっき言ったように、結構、汎用的に使える人間力というか、スキルになっていくので、もし好きなことがある人は、それをどっぷりやってみるというのもいいと思います。私が学生時代に戻ったらやりたいことは、いろいろなバイトです。私は、学生の頃はファーストフードやカフェのチェーン店でしかバイトをしておらず、それはそれで良い経験でしたが、それこそ社会人になるとあちこちで働くということは難しいので、何か月かでもいろいろな仕事に飛び込んでやってみるという経験があると良かったと今は思っています。

学生 やりたい仕事や、もし無い人がいたら、どんなことをしたらいいのでしょうか。

逸木 それは、私は指針があって、金です。ギャラです。金のいい仕事をするということです。なぜなら、収入を上げることが目標にいくと、仕事もどんどん複雑になっていくし、やりがいのあるものになっていくのです。社会に出てどうしてもこれをやりたいというものがある人は多分余り多くないと思うので、やりたいことがない場合は、もうかりそうな仕事やっていくというのも一つのやり方ではないかと思っています。

学生 好きな職業で収入が少ないのと、収入があっても、やりたいことではない職業では、どちらの方がいいですか。

逸木 やりたくないことをやるというのは、しんどいので難しいですね。本当に何でもいい、となったら収入だと思いますが、バランスです。いくらや

りたいことといっても、例えば今、アニメーターの方で月収7万円あるいは、8万円で、それでもアニメを書いているという人はいますが、それは少しづらい感じがします。ですから、ある程度、自分にとって必要な収入があった上でやりたいことをやるというのが、体も壊さずに結局、長続きするのではないかと思います。

学生 就職活動で自分のキャッチコピーを何文字以内で書いてくださいというものがあるのですが、本のタイトルを決めるときのコツといえますか、キャッチコピーはどのように考えるのですか。

逸木 タイトルは、難しいです。『虹を待つ彼女』は、私が最初に考えたものではなく、応募した後に直してもらうように頼んで、何点か出して決めたタイトルです。ですから、もしかしたらもっといいタイトルがあったのかもしれないという気もしています。キャッチコピーは難しいですね。私は学生採用の面接官の方もやったことがあるのですが、キャッチコピーはそんなに重要視していないというか、それよりは本人の雰囲気の方が大事だと思います。ですから、そこは無難なもので大丈夫ではないかという気がします。

学生 先ほど大学生時代にいろいろなバイトをやったかった、というふうにおっしゃっていたのですが、具体的にどのようなことを学生時代に仕事でやってみたいと思っていたのですか。

逸木 まず工場勤務です。パン工場でパンを作ったりといったことをやってみたいというのが一つと、あとバーテンダー、お酒作りです。居酒屋のチェーン店で働いていた経験がありカクテルは作ったことはありますが、そうではなく、いろいろな人も見ることができずし、いわゆる、場末の場みtainな所で働きたいというのがあります。工事現場とか何かの肉体労働もやってみたいです。やはり作家になると、いろいろな蓄積がものを言うというか、知らないことが多すぎると最近、痛感しているところで、その辺を代表に、いろいろなことをやってみたいという感じです。

学生 御自身が一番影響を受けるロールモデルのような人はいますか。

逸木 作家業で言うと、先輩作家がどういう経緯で今に至ったのかというキャリアを見えています。例えば、道尾秀介先生という方がいるのですけれども、

その方は割とコンスタントに、しかも結構、幅の広い作風で作品をずっと出して、あるときから自分の作風を固めて出している時期があって、それで直木賞を取った方なのです。諸先輩がどうしているかというのは結構、見えています。また、森先生というホルンの先生がいるのですが、その人のやっていることを結構、取り入れています。仕事の仕方もうそうですし、楽器の練習法も当然そうです。その人は、毎日とにかく決められたことを必ずやられる先生で、練習も「決められた時間、どんなにつらくてもやる」というふうにおっしゃっていたのは、すごく影響を受けています。

学生 社会に出るとき、社会人になるときに大切なことは何ですか。

逸木 これは間違いなく、健康です。特に心の健康です。まだお若いので体力的な面は大丈夫だと思うのですが、入る職場によってはどんどん精神を病んでしまうことがあって、一回、気持ち的に駄目になってしまうと、そこから立ち直るのはなかなか大変です。私も周りに、うつ病になってしまったりという人は結構いるのですが、一回なると立ち直りまでに5年、10年ぐらい平気にかかるので、そこだけは注意してほしいです。

学生 心の健康を保つために、何かされていることはありますか。

逸木 大事なことは、まず体を動かすということです。あと睡眠と、嫌な人からはなるべく遠ざかるということです。やはり人間関係がとても精神に影響を与えます。なかなか最初、入った頃は難しいと思うのですが、例えば嫌な上司がいるとか、パワハラしてくるとか、そういうトラブルに遭うときも多分あると思うので、そういう場合はなるべく期間を決めて、遠ざかるというふうにした方がいいと思います。ずっとそこにいるとなると、つらいし、そこで病んでしまうと立ち直りが大変なので、例えば1年なら1年後に必ず辞めるというふうに決めて、準備するという感じででしょうか。だから、逃げるということと、体を動かすということです。

山下 アルバイトをしておけば良かったという話が先ほどあったのですが、これを学んでおけば良かったとか、何かありますか。

逸木 学んでおけば良かったということは山のようにあります。一番は語学、英語でしょうか。海外旅

行が割と好きで、ときどき行くのですが、英語が私は不十分で、海外に行って英語が使えないとなると、結構そこで行動が制限されてしまいます。そこが少しもったいないと思うときがあります。社会人になってからも確かに勉強はできるのですが、やはり時間がどうしても限られてきます。仕事もそうですし、皆さん、家庭を持つようになると家事もやらなくてはいけないし、子どもができるとなると、さらに自分の時間が取れなくなってくるので、やはり勉強するやりやすさというか、敷居の低さみたいなものは学生の方が多いです。その中でも一番やりたかったのは語学でしょうか。

学生 自分の趣味でギターをやっていて、曲を作ってライブでやったりすることがあります。話を聞かせていただいたときに、作業を最後まで完成させるのが重要だというのがすごく参考になったのですが、自分が完成させた曲をライブ等で初めてやろうとなったときに、本当にこれでいいのかとすごく思います。自分でゼロから作ったものは自分自身みたいなところがありますよね。それがいろいろな人の目に触れたときに、どうやって受け入れてもらえるのか、すごく不安があるのですが、そういうときに何か後押ししてくれるものはありますか。

逸木 後押しはありません。これはもう、やるしかないと思います。私の場合、投稿していた頃は割と気楽で、読むのも人の目に触れない状態でずっと書いていました。投稿しても、読むのは下読みと審査員ぐらいで、素人が書いたものだから、特にそこで何を言われようと余り関係ないところがあったのですが、いざ本を出すとなると、ライブと同じく客の前に立つわけです。そこはもう、飛び越えるしかないという感じです。私の場合は、お客さんの前に出す前に編集者に見せるという段階があって、駄目出しがばんばん出てくるので、そこもやはり心理的に結構、苦しいです。そこももう乗り越えていくしかないと思います。ライブに関しても、やってみてうまくいかないときもあると思いますが、それは確かに失敗ではあると思うのですが、そこも失敗からまたフィードバックして直していって、最終的にいい形になっていけばいいのではないのでしょうか。

本を出すプロセスも一緒に、最初に編集者に出すときには、とてもそのまま出版できるようなものはありませんが、そこで指摘されて直すという細か

い失敗を積み重ねていって、ようやく世に問える形になります。ライブでいきなりやるのは心理的に大変だと思いますけれども、そこを何とか何回かやってみてブラッシュアップしていく。最終的に完成に持っていけばいいのではないのでしょうか。

学生 私も少し教室みたいな所に通っていて、作った曲をたまに先生に聞いてもらったりすると、ここをこうした方がいいと、言われます。確かにと納得するときもあるのですが、私が考えたものと違うと、衝突することもあります。小説を作るときに編集さんから駄目出しされて、自分が考えていたのと違う方向になってしまうということがありますか。

逸木 私は今のところないのですが、そういう話も聞きます。私に付いている、今の編集の方は、割と私の個性を引き出した上で商品化するように持って行ってくれるのがうまい人で、自分が本当はこれをやりたいのに無理やりこれを書かされている、といった衝突はありませんが、あるという話も聞きます。そこで作家によって対応が違って、本を出したから言うとおりに直して世に出すという人もいますし、どうしても自分はこれを書きたいから、これは引込めて他の会社に売ってしまうというパターンもあります。ただ、それがどう評価されるかというのはまた別問題で、作家が書きたいように書いたものが全然評価されないときもありますし、編集者がとにかく、こういうふうに直せと言うふうに直して世に出したものが、文学的にも売り上げ的にも評価を受けるということもあるので、そこはまた難しい問題です。でも、指摘を受けて書けなくなってしまう、作れなくなってしまうという状態になるのは、やはり良くないと思います。ですので、本当にどうしても受け入れられないというのであれば、そこは突っぱねるというのも手の一つです。

学生 私も音楽関係なのですが、社会人になってからもオケを続けられていたのですか。

逸木 やっていました。

学生 社会人団体に新しく入り直したのですか。

逸木 私たちの頃は大学のOBオケがあったのですが、割と私の世代でOBオケを作りたいという機運もあったので、オケを一つ作ったのです。そこでやっていたのと、東京はアマチュアオーケストラも多くて、やろうと思えば割とあちこちでできるのです。自分のやりたいような曲を取り上げてくれるオ

ケに応募して入るということをして、続けていました。家は、社会人になるまで実家に住んでいたのですが、卒業して就職してから、防音付きのマンションが今たくさんあるので、そういう所に引っ越して、そこで練習していました。

学生 今はされていないのですか。

逸木 今もやっています。やっているのですが、オーケストラ活動は時間がなくてできなくなってしまって、友達と小さいアンサンブルを組んで、そこで年に何回か発表しているというぐらいです。

学生 私も社会人になってからも続けたいと思っているのですが、練習量が減っても続けられるコツを教えてください。

逸木 私がやっていたのは、練習を朝一にやるということです。仕事から帰ってきてからやるのは、なかなかモチベーションも続かないと思うので、朝起きて、朝ご飯を食べたら30分ぐらい練習して、会社に行くということをやっていました。やはり練習しやすい環境を作るのが大事だと思います。例えば、社会人の人でもカラオケボックスに行って練習している人もいるのですが、家に帰ってきて、楽器を持ってもう一回出掛けるというのは心理的に結構ハードルが高いです。それなら、もう防音で24時間、音出しできる所に引っ越しして、そこでやってしまうというのが大事だろうと思ったのです。

山下 昔からシステムというか、環境を作って、自分がやりたいことをできるようにするというところに結構こだわられているのですか。例えば、書くときは自分でプログラムを作ってアクセスできないようにしたり、オーケストラの練習は行くのではなくて続けることが最優先で防音室を借りるようにしたとか、昔からそういうこだわりがあったのですか。

逸木 防音室の件は、割と卒業してすぐだったので、それはたまたまそれでやってうまくいったというのがあるのですが、自分の行動を仕組みにしていくなとか、ルーティンワークにしていくなとか、この時間はこれをやって、この時間はこれをしてといった、そこに自分を当てはめていくということは割とやっているのではないかという感じですよ。

山下 大学時代のオケを振り返ってみても、逸木さんはきちんと朝から練習していたと思います。お話をうかがっていると、ビジネスで成功させるための

秘訣ということでは、さっきほどおっしゃられていたように、根性に頼るのではなくて仕組みを作ること、とにかく健康に気をつけること、そして一時的ではなくコンスタントにやることが大事であることを改めて思いました。

逸木 全くそうです。それは基本的に何でもそうだと思います。

山下 そういうところが、きちんとされているのだらうと思います。もちろん、才能のこともあると思うのですが、それだけではなくて、正攻法のところをきちんと、いわゆる基本を押さえられて書かれて、こういう受賞につながっているのだなというのをとても興味深く、個人的にはうかがわせていただきました。やはりふだんからコンスタントにできることをすごく気を付けているから、気分転換が必要になるタイミングが余り来ないのでしょうか。

逸木 それもあります。今は基本的に1日、朝から夜まで仕事になっているので、たまに1日、2日ぐらいいは休みたいときもあります。

山下 御趣味の1つである旅行は、国内とか海外とか、地域があるのですか。

逸木 旅行は、国内旅行の方が最近、多いのですが、先月はカンボジアに遊びに行ってきました。

山下 現状では、旅行の際にも小説を書く題材を求めてられているのでしょうか。

逸木 今後は出てくるかもしれませんが、今はありません。

学生 カンボジアというと、私のイメージでは学校をみんなで作ろうといったイメージがあるのですが、観光はどのような場所に行かれたのですか。

逸木 カンボジアは、観光はいいです。一番有名なのはアンコールワット、アンコールトムという、1000年ぐらい前にあったクメール王朝の遺跡が残っています。そこが一番の観光地です。カンボジアの首都であるシェムリアップの周りに遺跡が点在しているので、割とコンパクトに見どころがまとまっています。そのために割と遺跡も見やすいし、あとは、旅行の前半戦で遺跡はあらかじめ見てしまったので、後半はホテルのプールに入ったりして、割とのんびりしてリゾート的にも楽しめました。そこもいいところなので、是非一回行ってみてください。

山下 国内は、いつも違う場所に行かれますか。そ

れともリピートというか、同じような所に行かれるのでしょうか。

逸木 リピートは余りしません。行ったことがない所が多いので、あちこち行くようにしています。

学生 一番印象深く残っている場所はどこですか。

逸木 一番良かったのはパリでしょうか。街がきれいで、あと音楽も聞いてきたのですが、パリ管弦楽団も素晴らしかったし、もう1回行きたいです。

山下 そろそろ終わりの時間となりましたので、これで終了ということにしたいと思います。今日はお忙しいところ、ありがとうございました。

逸木 ありがとうございます。聞いていただいて楽しかったです。

山下絢研究室・出席学生（○は代表学生）

浅見優香、○池田奈樹、大屋果音、川下紗奈、黒川麻美、佐野なつみ、紫藤菜々子、埴有里、丸山日菜乃、森谷真由子、山本京佳、和田奈菜絵

